

ロッテルダム日本人学校における国際理解教育の実践

前ロッテルダム日本人学校 教諭

茨城県ひたちなか市立勝田第一中学校 教諭 樋口伸吾

キーワード：外国語活動、異文化理解、交流活動、英語の有用性、“warm heart”

1. はじめに

ロッテルダム日本人学校はアムステルダムに次いでオランダ第2の都市である、ロッテルダム北部の閑静な住宅街の中にあり、設立母体は在蘭日本商工会議所（JCC）である。校舎は、世界の日本人学校でもめずらしく、オランダ王国、ロッテルダム市、インターナショナルスクール（AISR）、日本人学校の出資により設立された国際教育センター（IEC）の中にあり、施設をインターナショナルスクールと共有しながら、様々な交流活動を実施している。全校生徒約30名の小規模校であり、家庭的な雰囲気の中で子供たちは伸び伸びと活動している。実技教科を複式で行うことや、縦割りグループによる異学年集団での活動から、子供たちは学年の枠を超え、お互いの良さに気付き、認め合いながら学校生活を送っている。

本校が位置するオランダは、ヨーロッパ北西部に位置し、オランダ語などを公用語とし、九州程の面積を有する国である。17世紀には、オランダ黄金時代と呼ばれ、オランダ東インド会社に代表される貿易によって大きな富をもたらし、世界に大きな影響を与えた。鎖国時の日本とも独占的に貿易を行っており、もともと自国の外に目を向ける気風があったと言える。

現在、オランダ国内における、英会話可能者人口の割合は2012年の時点で90%と非常に高い。実際に住んでみての感覚としては、スーパーやドラッグストアでも十分英語でやり取りできる環境である。現地校の子供たちを対象として筆者が行ったアンケートでは「英語は役に立っていますか」という質問に対してほとんどの生徒が「はい」と答えており、子供たちも英語の有用性を実感していることもわかる。

本研究の前提として、オランダでは外国語であるはずの英語が非常に盛んで、外国人にとっては英語を使うことができればほぼ生活に困らないという現状を押さえておきたい。なぜオランダでは英語を話せる人が多いのか、その要因や背景から、日本人にとっての英語学習に有効な手立てについて仮説を立て、それに基づき本校で取り組んだ交流活動での実践から、日本での英語指導における有効な手立てを見出したい。

2. 実践内容

ロッテルダム日本人学校（以下本校）では、教育活動の柱として、近隣施設との交流活動を年に複数回行っている。特に本校はAmerican International School of Rotterdam（以下AISR）と隣接しており、その利点を生かし、様々な行事をAISRと一緒にしている。交流では、言語面での指導の他、“Warm Heart”を合言葉に、相手と関わる際に大切なことを指導している。どちらかというと内向的な子供が多いのが本校の課題であるため、より他者と主体的に関わることができるようにするための手立てである。“Warm Heart”は①Smile（えがお）②Welcome & Thank you（ようこそ&ありがとう）③Compliment（いいね）④Show Interest（いいね）の4つの柱によって構成されている。指導の際には、これらの言葉をキーワードに、他者と関わる際にどんなことが大切なのか、子供たちが考えられるようにしている。例えば、「相手と関わる際には笑顔を大切



Warm Heart の概念

にする」「交流に来てくれてありがとう、呼んでくれてありがとうの気持ちをきちんと伝える」「活動中、相手の良いところをみつけて、伝える」「相手について興味をもち、質問する」などといったことが自然とできるように、繰り返し指導してきた。

(1) 福笑い交流活動

筆者が実践者となり、平成26年1月と、平成28年12月の2回行った。ここでは平成28年12月のものを報告する。

本校小学部1、2年生と、AISRのGrade1（6、7歳）、Grade2（7、8歳）の2クラスで福笑いと一緒に遊ぶことを通した交流活動を行った。以下がその報告である。

小1・2 交流授業報告

ねらい	①一緒に福笑いを楽しむことを通して、AISR児童と積極的に関わり、交流を深めることができる。 ②英会話で学習したことを活かし、英語やボディーランゲージを積極的に活用し、自分について表現することができる。			
学習内容 (単元構成)	日 時	活動時間	活動内容	評価規準
	11月17日	学級活動	活動内容やめあてについての説明を聞く。	活動の内容について知り、今後の見通しを持つことができる。
	11月17日～30日	学級活動 英会話	活動で用いる英語の練習をする。	積極的に練習に取り組み、自分の力を伸ばそうとすることができる。
	11月30日	学級活動	活動のめあてを書く。	きちんと自分に力に合った、めあてを立てることができる。
	12月1、8日（本時）	学級活動	AISRの児童と一緒に福笑いを遊ぶ。	自分が知っている英語を使い、AISRの児童と福笑いを楽しむことができる。
子どもの感想	<ul style="list-style-type: none"> ○福笑いのcompetitionの時に負けてしまって友達が泣きそうだったので“Don't worry.”と言えました。 ○この前よりも褒め言葉が言えて良かったです。笑顔で交流ができたので良かったです。老人ホーム訪問で福笑いチームなので、英語を使いたいです。 ○私の良かったところは笑顔で自己紹介ができたところです。 ○前の時は褒められなかったけど今度は言えました。良かったです。(今後は)笑顔でプレイグラウンドで声をかけたいです。 			
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ○今回の活動を通して、交流に抵抗を感じていた子が、徐々に英語を積極的に使用したり笑顔が見られたりと、変化が見られた。 ○事後、AISRの児童が、ありがとうの手紙を書いて持ってきてくれたので、こちらも手紙を書いてお返しした。お互いの距離が縮まったように感じる。 ○オープニングセレモニーや、活動中のやり取りなど、使用する英語を厳選して繰り返し練習したことで、子供たちの不安を取り除いたうえで本番に臨むことができた。 ○相手を変えて2回実施したことで、1回目にて「褒め言葉をうまく使えなかった」という課題を2回目にクリアすることができた。 ○練習でははじめるまでできなかった子も、周りが使っている英語を真似して使ってみるなど、前向きな変容が見られた。 ●相手が楽しんでいるときはこちらも楽しく活動できたが、相手が飽きたり黙ったりするとこちらも無口になるなど、相手の様子に合わせてしまう子供も見受けられた。より能動的に関われるような手立てが必要であると感じた。 			

この交流を通して、活動の内容を吟味し、必要最低限の英語を厳選し、繰り返し練習した結果、“Look at us” “Like this.” “What's your name?” などといった簡単な英語が身に付いたほか、英語を使うことに対する抵抗感が減ったように見える。実際、この活動の後にいくつか交流活動を行ったのだが、その中で子ども達は自分から

知っている英語を使おうとする姿がいくつも見られた。また、生活科で学校付近の商店街に探検に行った際には、店員に英語でインタビューをするなど、交流活動以外でも日常的に英語を使おうとする態度が見えた。

(2) 日本文化紹介

筆者が代表実践者となり、平成28年2月に全校の交流活動として行った。折り紙、羽子板、坊主めくりなど日本の伝統的な遊びを、AISR 児童と一緒に楽しむことを通した交流活動である。以下はその報告である。

日本文化紹介報告

ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ①日本の遊びや英語を活用して交流を楽しむ。 ②その場に応じた英語やジェスチャーを活用して、日本の遊びを紹介したり案内したりする。 ③1年間のまとめとして各学年に応じてコミュニケーションをとりながら、英語を活用しAISRと交流を深めたり楽しさを共有したりする。
学習内容 (単元構成)	総合的な学習の時間 6時間 + 3.5時間
子どもの感想	<ul style="list-style-type: none"> ○前交流した子や、プールで一緒だった子に「私のこと覚えてる」ときいたら覚えてたので良かったです。 ○Junという男の子が日本語を真似してくれたので嬉しかったです。 ○AISRの子たちが「ありがとう」と日本語で言ってくれたので嬉しかったです。 ○別れるときにハイタッチできたことが嬉しかった。写真を撮るとき自分からAISRの子の隣に行けた。 ○今年の交流で一番というくらいAISRの子と打ち解けることができた。 学んだことはどんなところにかせるかな ○普段の生活でお友達に何かしてもらったら何も言わないじゃなくて、ありがとうと言いたいです。 ○バレエのレッスンが終わった時に笑顔でSee you next time.と言いたいです。 ○隣の家の子と会ったらハローと言いたいです。 ○ありがとうの気持ちをタクシードライバーさんに毎日笑顔で言いたい。 ○名前を呼ぶと相手が振り向くことが分かった。 ○普段から目を見てお礼を言ったり褒めたり、相手の興味深いことがあったら質問したりと、学校生活でもwarm heartを意識せずにできるようにしたい。 ○warm heartは日本でも使えると思います。
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ○1年間の交流のまとめとして、子供たちが達成感をもつことができた。 ○AISR 児童との関わりを通し、彼らに親しみを持つことができた。また今後の関係の継続を望む声が子供たち(やAISR 教員)から多く聞こえた。 ○高学年を中心に、warm heartが日常に生きることに気が付けた子供が多かった。 ○オープニングセレモニーを楽しく行うことで、AISR、JSR 両方にとって良い雰囲気づくりをすることができた。 ○各学年が役割をしっかりと果たすことで、行事全体が上手く流れた。特に3、4年生がリーダーの意識をもち、活動に取り組むことができた。 ●主体的に相手と関わることを目指したが、その点でまだ受け身になってしまう児童生徒が多く見られた。生活指導と関わっていく部分だが、普段から意識させていく必要があると感じた。

この活動は、全校生徒対象であり、英語の習熟度に大きな個人差が見られることから、事前指導では厳選した英語リストを用いたほか、英語がうまく出てこないときのリアクション、ジェスチャーについても重点的に指導した。このことが、英語への抵抗感をなくし、かえって負担無く自分の知っている言葉を使おうとする態度に繋がった。

福笑い交流や日本文化紹介では、子供たちにとって英語を使うことは目的ではなく、コミュニケーションをとるための1つのツールであった。あくまでも英語を使って、AISR 児童と楽しい時間を過ごすことが、子供たちにとっての目的であったのである。そしてそれができたとき、子供たちは大きな達成感を感じたことが、子供の感想から見て取れる。このことは大きな成果であり、子供たちの中に、英語を使ってよかったという気持ちが芽生えたことの表れであると考え。また、事後に見られた日常的に英語を使おうとする態度は、今後の英語習得において、プラスに作用すると考える。

3. おわりに

本実践では、英語を使うことで自分たちも相手も楽しめるという場面を設定することで、英語使用に必然性を与えたことが、子供たちの意欲につながった。そこから得た1番の成果は「なぜ英語を学ぶのか」という、英語教育の根本に気付かされたことである。子供がおもちゃを欲しがるのはそれで遊ぶ楽しさがあるからであり、保有することそのもの楽しさがあるわけではないのと同様に、英語もそれを使って何かをなすことに意味がある。英語は国際語であり、世界中の多くの人と関わるための有用なコミュニケーションスキルである。今後の英語指導では、学習者が英語を使って他者と関わることに楽しみを見出せるよう、様々な手立ての必要性を強く感じた。

日本において、英語学習に必然性をもたせ、学習者のモチベーションを向上させるための手立てとして、ALT (Assistant Language Teacher) の活用、可能ならば英語使用者の集団との関わり等、子供達が英語を使うことに必然性を感じられる状況を設定することが有効であると考えられる。特にALTの活用に関しては、ALTを単に英語を教える人ではなく、英語を使って関わりあう、いわば交流相手として機能できるよう活動に工夫をもたせることが必要であると考ええる。

デジタルコンテンツの有効活用など、オランダの英語指導における先進性は確かにあるだろう。しかしそれ以上に多くのオランダ国民にとって、英語は非常に有用な言語であり、英語を使って何かをなすことへの明確なイメージをもっていることが学習内容の定着を後押ししていると考えられる。このことがオランダという国から学ぶべきことではないだろうか。日本人にとっては前述の通り言語構造の違いという、大きな壁があるとしても、「英語は便利である」「英語でこんなことができた」という経験の積み重ねが、英語の着実な定着に繋がると考える。また、本当の意味で英語を使って何かをなすことのできる人材の育成には、英語のみならず、他者を受け入れ、関わろうとする態度の育成も不可欠である。英語教育とはただの言語指導にとどまらない、幅広い要素をもち、そのためには指導者の更なる資質向上の必要性を強く感じた。